

同人誌（2017年3月号）

風 狂

風 狂 の 会

詩

梅咲く	神宮 清志
アンタレス(Antares)	出雲 筑三
悲しみ	高 裕香
権力を思考する人へ	高村 昌憲
拾った石	なべくら ますみ
玉手箱	原 詩夏至
年末に	北岡 善寿

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十六）	三浦 逸雄
-------------	-------

翻訳

アラン『わが思索のあと』（三十二）	高村 昌憲 訳
-------------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年2月号）

ヒノキの香りが部屋に満ちて
叩きノミと木槌で能面の荒彫りを進める
木片が飛び散りカンカンと冴えた音

「今年の梅の花はことさら綺麗だ」
師匠がそう言ってから間もなくあの世へ旅立った
奥様から師の仕事場の整理を託された

さっそく仕事場に行って師の常席に座ってみた
手元の道具を手に取り、見回してみたり
その空気に身を任せていた

「ああこの感じだ」
突然師の気分が乗り移ってきた
しばらくその意識に全身が包まれた

あれからたくさんの日々が過ぎ去っていった
そしていま師の旅立った齢に差し掛かってきた
ふとあの日の師の空気が身邊に忍び寄る

一瞬ノミを持つ手を休めて
庭に咲いた梅の花は...
今年も綺麗だ

太陽は地球の百九倍
アンタレスは太陽の七百倍
その巨星アンタレスの死は近い

死期がくると赤く染まり中空になる
そしてコアから一気に爆発する
熱力学第二法則は「形あるものは必ず崩れる」を教える

地球も燃える物が無くなれば
中が空洞になり爆発する
第二法則の例外はない

衝突ばかりを繰り返した
火の星の生涯
いよいよ南無阿弥陀仏

おっと滅びてゆくのでは...
いまさら倒木再生する気かアンタレス
おやおや新たな反応ガス同士でせめぎ合い

いつの世にか同じ道をたどる星
そこにはたゆまぬ進歩を正として
争い好きなゲノムがいる

ニンジンをぶら下げられて
走る馬の悲しみは、だれも知らない
馬自身も知らない。

生きて行くために
ニンジンを食べなければならないのか？
走らなくてはならないのか？

ニンジンをぶら下げられて
走る馬の悲しみは、だれも知らない
馬自身も知らない。

ニンジンのために走ってはならぬ。
空を仰ぎ、悠々と走ろう。
えさは自分で探せばいい。

生きるための糧は
どこにでもあるさ 限りなくあるさ
走らされる馬型人間には 決してなるまい。

実際の経験が不可能になると
強烈な印象が想像を生み出す
現実でも事実でもなくなると
無関心や不信と共に飛び出す

好意的なサークルは証拠でなく
常に精神力により支配して来た
思想も証拠による説得が少なく
力によって昔から支配して来た

幼年時代に受けた最良の忠告は
千に一つの証拠もなかったのだ
けれども信じるものへの和合は
証拠によって理解されることだ

思想の機能は殆ど規制にあるから
心を動かすものを常に信じている
不条理の中で酷く不安であるから
激しく心が動かされて信じている

政治的秩序の大罪を犯す共犯者は
武力と宗教の和合を夢見て居座る
その後も権力を保持し過ぎた者は
理を説く術策に強制する力を見る

ある日 ある国の ある所に
隕石が落下してきたという
ニュースはいち早く日本でも報道された

国営テレビは 州の上空で物体が閃光を放って爆発し
大きな煙の尾を引きながら落下して行くもようを放映した
住民たちは 5 6回の爆発音を聞いたと話し 航空機の爆発やミ
サイルの飛来を疑って 混乱を 来たした人も多かったと

驚きに満ちた一連の状況が報じられると テレビ画面は一転して
その州に住む市民たちの顔に移った 子供たちの足元に転がった黒
い石 彼らの握り拳くらいのものがあったり 指先を丸めた位のも
のがあったり 一人の子供は畑の土を手でほじくり 黒いつややか
な石を取り出していた その土の周辺にはまだ石の埋まっていそう
な いくつもの小さな穴が散らばっていた

隕石を手にした子供たちの顔は 面白いものを見つけた喜びに溢れ
テレビのカメラに向かって見せびらかす手は 得意そうだった
次にカメラを向けられたのは 太ったおじさん ビア樽のようなお
腹を抱え その腹を揺すっての笑い声

拾った隕石はとっくに売っちゃまったよ いくらになったんだか
もう全部呑んじまった

どこの国にもいるねえ
飲みたいばかりの抜け目ないおじさんや
拾った石ころをいつまでも大事にしまっておく子供が

何を隠そう

a uのCMの

奈々緒扮する

悪女の乙姫は

知り合いの

ナミさんそっくりで――

ある時

いやあ

そっくりだねえ！――と言ったら

あらそう？

ありがと！

じゃあ、これ、あげる――と

黒い小箱をくれた。

玉手箱だ。

ありがと！

とはいえ

一応訊くけど――と、俺。

どうなるの

これ開けると？

やっぱり……あれ？

さあね

何なら

開けてみる？――と、ナミさん。

そのまま

ふいと

席を外した。

俺は

玉手箱を

睨んでいる。

ねえ、どうなるの？――と

反対隣の
旦那の
トミさんにも
訊ねてみた。

ああ、これ？
俺も知らない——と、トミさん。
カバンから
もう
あちこち傷んだ
自分の
玉手箱を
取り出して。

中身 何だろうね？
ああ 何だろうね？

二つの 腕組み。
グラスの 氷の音。

テーブルには
二つの 玉手箱。

学校を出たら汲取屋になって
なんとか世の中の役に立ちたい
かつてそんな思いを真面目に抱いた男が
思い通りに汲取屋にはならず
流れ流れて住みついた
川の流れが寒い
気違部落をゆっくり抜けて
薄暗い山の小路を歩いた

なんだか没落した気分で
遅い昼飯を道端の古い
倒木に腰を下ろして食べる
目の前に木漏れ日が落ち
苺の赤い実が光る
生い茂る木立のどこかで
小鳥たちが鳴いている
巷ではこのところ
顔見知りの老人が続けて死んだ
何処かに行く当てがあつてのことか
今更案じることもあるまい
死んだものは死んだもの
だんさーん！と呼んでも戻りはしない
スタコラさんはどうの昔に頓死した
遠い田舎の村の近所にいた
いい齢をした痴け者の渾名だが
どこが一体スタコラだったのか
これも考えることは無駄である
それより日のあるうちに歩け
道を曲がりくねって登って行けば
見晴らしのきく頂上がある



三浦逸雄「山羊のいた家」12号（油彩）

神々の方へ

私はこうして神々の方へ赴きました。沢山の道がそこへ導きます。あるが儘だった人間に腹を立てるのは、余りに時間の無駄です。如何なる基礎も無く無限に続く誤謬の連鎖という仮説は、それ自体が人間嫌いです。従ってずっと昔から私は、薔薇と収穫の祭りである聖体の祝日を嘲笑する者たちを嘲笑していました。但し、クリスマスに嘲笑する人は誰もおりません。私は屢々、祭の詩的な響きや舞踊の永遠性に注目していました。そして祈る動作は、花が咲く動きと同様に自然であることに私は何度も気付きました。更に、両手の動き、呟く言葉、跪くこと、そして十字を組む腕からなる実際のこの想像力をもっと詳しく分析すれば、私はそこに人間の平和の表現と、瞬間瞬間にしか実際に見出せないと思えるしかる来世への告知しか見ませんでした。私が、人間という現世の自然に全てを見出した時、超自然は虚構に思えました。私はそれを現実的に実証的に理解しました。地上の神々を考えるには非常に注意深かったコントの思索に、私は導かれました。そこからは何時も詩人によって案内された私は、聖書も調べました。私は人間以外のものはそこに何も見出しませんでした。少なくとも全てが人間なのです。

コントは崇拜を、本当の対象である人間に戻すために、多くのことを行いました。すると余りに高度な秩序を齎すものである、政治的群衆としての人間性をコントは理解しましたが、この〈偉大な存在〉を彼が取り戻した記念という遠い昔の意味によって「既知の存在で最も生き生きとしたもの」に仕上げることに成功しました。死者たちは生者たちを支配することを、私は理解することが出来ました。それは呪いしか伝えない遺伝の亡霊によるのではなく、そこに最も相反するものがあるという観念によるものです。それは人間において最も純粹で最良のものですが、決して存在しなかったものであり、敬虔な心や賛美の心によって君臨するものです。極めて自然なこの観念は、あらゆる慰藉の主題になるものです。私はまさしくそれに根本まで従ったと信じますし、真の敬虔な心による手当てを受けない限りは、絶えず夜に彷徨うと言われている幽霊たちが分かるまで従ったとまさしく信じます。この例そのものは、全ての宗教を明らかにしてくれました。何故なら、大きな石の塊の下に死体を埋葬しなければならないとか、火で燃やさなければならないのは、衰弱して侮辱された死者の辛いイメージとか、錯乱した病人や震え声で話す老人の哀れなイメージも、それ自体の中で消して仕舞わなければならないことも意味しているからです。それは決して死者を正確に思い出すことではありません。それは百回も千回も殺すことです。全ての敬虔な心はそれ故にその力において、そしてその栄光において自ら出来る限り死者を蘇らせることにあります。私自身も、誰もがやるように両親や亡くなった友人たちへの美しいこの瞑想に耽りました。私も、誰もがやるように伝説を創りました。伝説とは、語られるのに価値があるものです。私はこの豊かな観念を涸渇させませんでした。でも、語る人の口や死者たちの美德を響かせる気配りを時々浮かび上がらせることには殆ど成功しませんでした。生者たち

も同様でした。しかしあなたは、生者たちが自分自身への贅辞を、まるで振り払っているかのようであるのに気付いていたでしょうか。先ずは生まれつきの謙虚さから、そして私には大変に立派と思われませんが他人が賞讃するような英雄の中には少しも存在しないという怒りから、振り払っているのです。悲しいかな。この自己認識はそんな風に話し、そんな風に悪魔のようなやり方で証言しながら死者たちを深く傷付けるしかなかったなら、悪人を生むようになるに違いありません。そうすると私は既に、最善のものを救うために、そして出来ることならその他のことは忘れるために、それは自分自身に対する一種の義務であると考えてるのが好きでした。それ故に、それは真の悔悟であると自分に言いました。その代わりに実を結ばない後悔は、自己の亡霊の中にあります。私はその様にして宗教の中心におりました。私は天国と地獄を生み出しました。多くの聖人たち、永遠なる父と母、そして許されたくもない悪しき息子たちも又理解しました。これらの炉端の観念は少しも偽善を含んでいませんし、集団化された社会の陶醉も無く、目覚めている観念です。これらの冬の物語が最も楽しくて最も容易な全ての私の思考であり、私が人間への温かさを掻き立てるものなのです。その時の私は、ミケランジェロが三角形の形式の中で刻んだ顔のように、永遠のテントの下にいます。私は、優しくはない自然の中で、私が選んだ訳でもない仲間にも囲まれて、私自身の他には誰もおりません。『人質』のシーニュの卓抜な言葉によれば、その時の私は最も低い場所に座らされているのです。最早そこから降ろされ様がありません。その時は私の心の中の神々がやって来て、ホメロスが言ったように乞食に変装しているのです。その時は善良な砲手のジャンンは、アキレスにも匹敵しているのです。生者であった彼のことを私は殆ど知りません。けれども私は、彼を締め付けていた拘束もなく、奴隷状態もなく、現実的な力によって生きている彼を見ます。彼は生きていた時以上に、今も生きています。この様にしてどんな人も、その孤独のうちから英雄と永遠の神々を生みます。それではカエサルは、彼に何を生むのでしょうか。しかしながら彼の失った友が、彼にカエサルを説明します。それとは逆にカエサルの顔立ちが、パトロクロスとアキレスの友情が全ての友情を明らかにする如く、親しい英雄を照らし出してくれます。この様にしてここに沈む夕陽と微光の輝きや、煙と踊る影の中で、実際の煉獄と物語作者たちの天国への希望が生まれます。地獄に関しては、物語の中の悪人たちや食人鬼のように、見知らぬ人々だけがそこへ入れられるのです。この様に人間の宗教を家庭で静かに考えるために、私は歴史の魂から何かを取り除きました。カエサルやポンペイウスや全ての有名な人々、そして更に誰かを地獄へ投げ入れる危険はなかったでしょうか。実を言えば私は、より一層身近でまさしく生気を蘇らせた人間の愛によって、彼らを救済しました。つまり敬虔の心が最初になければならない代わりに、それが最初にあつて欲しいと思うことの代わりに、そしてそれを大いに必要とする死者たちの全ての力を救済する代わりに、コントは私たちの偉大な祖先を美德一覧表によって愛するように促しているように思えることが時々あるということです。その様なものは私の〈影〉の王国でした。〈王座〉も〈統治〉も決してありません。カエサルは乞食でしかありませんでした。私にとっての神を見出すことなのです。

私は、何時も愛読書の一冊であった『セント・ヘレナの回想録』を読みながら、この記念的な

行いから試していました。下らない愚かな連中から（彼らは愚かなことを行なっていました）、
「私はあなたがナポレオン支持者とは知らなかった」と言われたのです。私は決してナポレオン支持者ではありませんでしたし、これからも決してそうではないでしょう。行列が通過する時に脱帽するのは私の性分に合いません。私が脱帽するのは次の日です。次の日とは、詩人が言うようにワーテルロー（1）のことです。セント・ヘレナのことであり、墓場のことです。それ故に、そこにいるのは乞食皇帝です。彼は書物によって私の処に来るのであり、最早私しかいないのです。少なくとも私には、書物の英雄は全てその様に見えますし、大変に影の薄い彼らを読者が生き返らせているのです。その時私は皇帝の様々な作品を取り上げて、炎と感嘆に溢れた人物で如何なる人物でも構わずに、その人物の中身を信じた稀有な人間の一人を構成していました。その稀有な人間の一人は宮廷人たちを裁いて、自分自身の宮廷を軽蔑したのです。「あなた方は何事にも後悔しない人間を見ているのだ」とナポレオンは追放された船上で、八月十五日の誕生日を哀れにもお祝いする時に言いました。彼自身は、誕生日のことを少しも考えていませんでした。何故この大問題についてテーヌが語った愚かなことが（彼は愚かを演じていました）、私に戦闘態勢を映して見るのか、十分にお分かりのことと思います。この人生に天国はありません。全てを信用してはなりませんし、全ての悪魔から身を守らなければなりません。悪魔はあらゆる信仰を取り除くでしょう。私たちが過去の軽蔑の上に未来を建設することはない、と私は確信しています。人間嫌いは正義の敵です。現在により良き正義を告げるものは何もありません。それどころか正義と希望が輝いているのは過去です。そこに私たちの弁証的思考のうちに、それ自身が極めて自然な黄金時代の虚構という名残の全てがあります。私が信じるものに、進歩は少しも入って来ません。私が見る処では、歴史よりも伝説の方に真実があるのは何故でしょうか。私は可能な限り説明します。それ故に私自身の裡や炉端で、あらゆる宗教活動が悠久の時代から信じることの全ての理由を持って来ることを、私はやり遂げているのです。しかし、この共通した踏み板への復帰は私には、黄金よりも貴重な貯えである全ての不信仰と一致させる助けになっていないのです。

私は新しい人間を思考しようと試みます。その人間は、つまり人間全体を理解して、騙されることなく希望を持つ人間です。自分を自由であると言う精神の人々は、殆どそこを通過して行きません。彼らは愛するものに一番良く似ている人や書物について、偽造や虚偽の疑いを投げかける以外に何をしたと言うのでしょうか。この不快感は社会主義者、共産主義者、無政府主義者、あるいは言いたいように言って良いのですが、これらの人々の意識の中の至る処にあります。私はそんなにもカトリック的ではありません。キリスト教的でさえもありません。しかし私は、全歴史で一番輝かしい出来事を、私が既に述べた方法で祝うように主張します。それ故に私はそれを友として、敢えて言うなら敬虔な心で言うこともあるのです。私はそこに、出来る限り人間的なものを全て求めます。私は余りに滓しかないとしてそれらを投げ捨てます。私が投げ捨てると言う時、この動作は何時も慎重であるのを知って下さい。私は殆ど全てを救うこと、いや本当に全てを救うことに決して絶望していません。というのもローマ教皇の最も嫌な者も、私の兄弟とし

ての人間であるからです。何故私は、有名な「無花果の季節ではなかった」を、無花果の福音書の物語において救ったのでしょうか。人間の信仰を、これ以上巧みに説明しているものは何もありません。というのも、人間のどんな断片でもマザーグースの一つの物語でしかなかったとしても、少なくとも注意して聞くに値するもののように私には思われるからです。この敬虔な心は、発掘と廃墟を通して可能な唯一の道案内です。要するに、過去の時代を未開の時代として、そして昔の物語を不条理の蓄積として常に論じることは、出発から余りに間違っていると私は思っています。悲しいかな、もしも現代を人が間違っていて理解していたなら、何でも言えるのではないのでしょうか。従って人は、人間を改造したいのです。この意志は高貴なものです。私がここで呼び戻しているあらゆる理由と共に、彼は援軍としてコントの思想を持って来ます。それは、望ましい人間の変化は実際には非常に小さなものであるということです。

要するに、以上が理性による教義の吟味が私を導いた処でした。しかし私の前には、或る種の専門的問題が残っていました。というのも私は、英知よりも想像力の方が強く、そして正確に心を打つことに気付いていたからです。その点で私はヘーゲルに従って、ヘーゲルの芸術や宗教についての力強い思索を迫りました。私が把握した大思想とは、宗教は芸術についての反省以外の何ものでもなく、その思想はヘーゲルの概要の中にありながら、屢々その展開において見失われているものです。それはかなり明白なものでした。寺院や彫像は大規模な文書のようなものでした。正確に言うなら、人間たちが絶えず問いかけるスフィンクスの様でした。そして、神学は出来るだけその後を追いました。この観念はそれ自体が神話的です。そして、叙事詩的物語がその観念を齎すというのも一つの言い方です。しかしながら私は、この狂った想像力が如何にして理性によって規定され得るのかを理解しませんでした。想像力は私たちの内面に働きかけることが出来ます。そして別世界を創ることが出来るのを私が否定した時に、ようやく私はそれを理解することに近付きました。何ものかである恐怖と、何ものでもない幻覚をまさに束ねようとしながら私は、完全無欠なこの世には幻影も幽霊も不在であることしか見出さなかった時、神々、取分け小さな神々の近くにいました。対象の無いこの恐怖は、想像力による虚無によって眼に見えないものを創り出していました。しかし、それは余りに小さいものでした。真の想像力を事実にして、そして最も自然な歩みの中でさえも身に付けなければなりませんでした。というのも芸術は屢々緻密であり、少なくとも神学者が語るものの中でも緻密であるからです。（完）

（1）ワーテルローは、ベルギーのブリュッセルの南方にある町。一八一五年にナポレオン（一七六九～一八二一）は、英国・プロイセン連合軍に致命的敗北をした。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる

。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『文明国の戦争で真の原因になるもの』『神々』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齢知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。

帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年2月号）

アラン『わが思索のあと』（三十一） 人間嫌いの拒否：人間は動物より無造作に人間を殺しています。それでも、人間嫌いを拒否したことは、難しいけれど良いことと思いました。よい人間を信用し愛すことから始まるように思います。自然の美しさを賛美し、精神の崇高さ、立派な行いで、全てを生き返らせたなら理想と思いますが・・・

三浦逸雄の世界（十五）：荒野を、独り真っ直ぐに歩く男に何が待ち受けているのでしょうか？

インテリ：寅さんのひと言から様々に思いを廻らされています。どちらにしても、人情味のある人に惹かれます。

賢い親：幼い子に笑いかけられると、嬉しくなって笑い返します。手をたたいて喜んだり別れにバイバイしたり、よくあるほほえましい風景を詩になされて、いいものだと感じ入りました。すまなそうに頭を下げなくてもいいのにと思いましたが・・・

雪が降る：雪が人の上に、降りてくる、また降り積もる。そして、己の胸の内を訪ねる。思いのたけの深さを痛感しました。

朝を開こう：故国を旅する夜明けの喜びは格別のことと思えます。終連に感動しました。

英雄を思考する人へ：独りでは生きてけない。けれど、不安の霧を晴らすために、何もできないでいます。それではいけないと思っています。

お砂：足元の砂に寄せるやさしいまなざしと、終連がよかったです。

砂：壮大な砂が浮かびました。終連に考えさせられました。

詩二題 時計：時の流れの中に、人の生死があるんですね。光る仏壇が鮮明でした。 鳥の

癒癒：ザクセンや鰐の涙を教えていただきました。ヒヨドリも水浴びが好きなんですね～。癒癒おこすのも分かる気がします。それに、ツバキなど花も好きなんですね。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)
第32号 (2017年3月登録)

<http://p.booklog.jp/book/113667>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)
編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113667>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト